

「石巻専修大学」

高大産連携による 地域活性化への挑戦

舛井 道晴 ● 石巻専修大学経営学部准教授

はじめに

石巻専修大学は、宮城県石巻圏域の高校、企業・法人などと連携し、地域の人材育成と活性化を目指す「高大産連携プロジェクト」を展開している。その一つに、ソフトバンクグループ株式会社の「Pepper社会貢献プログラム」への参画があり、本学と高校が連携し、「震災伝承」、「観光振興」、「防災」など五つのテーマに即したコンテンツを作成している。

本稿では、その中で「観光振興」を目的とした石巻市立桜坂高校との連携による「まちなかポスタープロジェクト」を紹介する。

1 地域と社会のこれからを考える

桜坂高校では、毎年石巻市内の店舗や企業をポスターで紹介する取り組みが行われている。それを土台にして、実際にポスターを制作した桜坂高校生と石巻専修大学生が連携し、石巻市内の商店街や企業の情報をPepperが紹介することによって、石巻市の魅力をよりクリエイティブに伝えるのが本プロジェクトである。2017年

度は、クイズを通じて石巻を知ること、コンセプトにしたアプリ「石巻博士」を制作し、2018年度は、郷土料理の調理法を学びながら石巻を知ることができるアプリ「エスプロ・クッキング」を制作した。それぞれ、人型ロボット



ディスカッションの様子



外国人観光客へのプレゼンテーション

「Pepper」とのコミュニケーションを介してクイズに答え、料理を体験するという点に特徴がある。

本プロジェクトに参加した高校生と大学生にとっては初めての協働ということであり、当初はいささか緊張気味であった。しかし、「そもそも地域活性化とは?」「石巻の本当の良さは?」という問いに対して真剣に考えていくうちに、いつしか一体感が生まれ、議論が活発に行われるようになった。本プロジェクトが、高校と大学という垣根を越え、同じ地域に生きる若者たちが共に地

域活性化のために行動する場となったことは非常に意義深い。そして何よりも、Pepperという新しいテクノロジーがメンバーの結束を強固にし、アウトプットまで導いたという点も過言ではないだろう。若者たちにとって、アプリケー

ションやロボットで課題を解決するという取り組みはとても刺激的であったようだ。地域のことだけでなく、これから社会全体や自らのキャリアを考える上でも、重要な機会となったといえよう。

2 今後の展開

石巻では、地域全体で外国人観光客の受け入れに力を入れている。2018年9月に、大型客船が石巻に寄港したときに実施した学生によるアプリのデモを交えたプレゼンテーションは好評であった。

また、若者がどのような問題意識を持ち、どのような解決策を提示するかという傾向を、この2年間で把握することができた。次の1年は、このイベントのように、彼らの制作してきたアプリを地域の中で実際に稼働させるフェーズに移行したい。さらに、2019年1月には石巻市、石巻専修大学、ソフトバンク株式会社は包括連携協定を締結した。行政の協力も得ながら、本学発の高産連携プロジェクトを、「高大接続」や「若者たちを地域活性化に巻き込む」というテーマに対する回答の一つとすべく、今後も力を入れて取り組んでいきたい。

【甲南大学】

「加古川『知』を結ぶプロジェクト」の展開について

松下 賢一 ●甲南大学地域連携センター事務室課長

本学は2016年度から、加古川市および神戸新聞社と連携して「加古川『知』を結ぶプロジェクト」に取り組んでいる。学生チームが、加古川市内の企業が抱える課題や地域の課題を調査し、解決策を提案するものであり、2018年度で3年目を迎えた。本学はこのプロジェクトと並行して、2016年6月に神戸新聞社、2017年5月に加古川市とそれぞれ包括連携協定を締結し、連携を深めてきた。

プロジェクトの流れとしては次のとおりである。参加するゼミやプロジェクトチームを6月に学内公募し、課題を提供する企業・団体や市役所の各部門などのマッチングを行う。各チームはマッチング先との打ち合わせにより課題を設定し、担当教員の指導の下、9月からヒアリングやフィールドワークなどを実施し、調査・研究

を進める。12月の中間報告会を経て、1～2月に行う成果報告会でプレゼンテーションを行い、課題解決策を提案する。

2018年度は、五つの団体が抱える課題、すなわち企業ブランドイメージの向上、商店街の活性化、市内の観光資源の活用方法などについて、7チームが活動しており、2月の成果報告会に向けて、提案内容の精査やモニタリーイベントの開催など準備を進めている。

このプロジェクトは、学生という若者の立場から企業や地域の課題解決策を提案することに特徴がある。企業・自治体・各種団体は、当事者では思いつかなかった斬新な提案や、若い世代の興味・関心に沿った企画などを知ることができる。学生が経営学的手法で分析することが、組織運営や経営戦略を課題とする中小企業に役立つ場合もある。一方、学生にとっては、大学で学んだ専門知識を社会の現場で活用することを経験できる。また企業、自治体、各種団体の課題について調査することは、今後の学生自身のキャリア選択にも資すると考えられる。学生の提案が企業に採用されることもあり（地酒のPRイベント、商品の新規販売戦略など）、学生は自分たちの調



2017年度 成果報告会の様子

査・研究が社会と密接な関わりを持つことを実感できる。プロジェクトにおける調査や提案は学生の主体性を重視し、担当教員の指導の下で一定のレベルを確保している。それとともに重要なのが中間報告会・成果報告会である。中間報告会終了後は、成果報告会に向けて、連携先との打ち合わせの場も設けている。成果報告会は地元関係者の前で実施するため、学生のプレゼンテーション能力は、その過程において向上している。また成果については、神戸新聞本紙やWeb版で発信されるので、地域連携や地域活性の新しい形が広まることも期待できる。

初年度は中小企業の課題解決がメインテーマであったため、参画するチームも、経営学部のゼミのみであったが、2年目以降は地域・行政課題も加えてテーマの範囲を広げたことにより、2018年度は経済学部、知能情報学部、マネジメント創造学部などの学生も参加

するようになった。市役所・地元団体の協力を得て実践を行うチームや、商店街でモニターイベントを企画するチームも出てくるなど、プロジェクトに積極的に参加する学生も年々増えており、一大プロジェクトに成長しつつあることが実感できる。

毎年、終了後に関係者で反省会を行い、次年度に向けて改善策をしっかりと講じてきたことがプロジェクトの充実につながっていると思われる。またこのプロジェクトでは、本学の卒業生組織である「東播磨甲南会」に、成果発表会後の交流会の開催についてご協力いただいている。交流会には卒業生も参加し、学生に感想・助言をするなど、卒業生と現役学生との交流の機会ともなっており、学生にとっては、今後の学生生活の励みになる貴重な機会になっている。

最後に、このように当プロジェクトが多くの関係者との連携、協力により開催できていることに感謝するとともに、本プロジェクトから加古川の活性化につながる取り組みが生まれること、また参加学生の中から卒業後に加古川で活躍する人材が出てくることを期待し、今後もプロジェクトの充実化に取り組んでいきたいと考えている。

※記事の内容は執筆時点のものです。

「龍谷大学」

地域デビュープログラム 「町家deうどん」

石原 芳典

● 龍谷大学
総合エクステンションセンター事務部長

1 背景

本学は、第5次長期計画の中で「地域に根ざした大学づくり」を目指し、さまざまな地域連携の取り組みを展開してきた。2016年に、京都市と大学コンソーシアム京都が実施する「学まち連携大学」促進事業に採択されたことを機に、地域連携を推進する事業を全学的に展開している。

本事業では、本学に在籍する一人でも多くの学生が地域連携活動に関わりを持ち、卒業後も地域と関わりを持ちながら、よりよい社会と自らの人生を創り出すことができる人間に成長できるよう、学生の地域連携活動を啓発し支援する取り組みを行っている。その具体的取り組み組

みの一つとして、学生がうどんづくりを通じて地域住民と交流し、地域連携活動への関心を高めることを目的に、「町家deうどん」を開催している。

2 深草町家キャンパス

開催場所は、本学深草キャンパスから徒歩10分ほどのところにある「深草町家キャンパス」である。ここは、築150年を超える町家を改装したものを地域連携の拠点として本学が借り受け、地域住民との協働活動や交流のほか、授業や調査・研究の活動拠点、学生のサークル活動など、さまざまな用途に活用している。

その管理運営体制は、本学の教職員と地域住民で構成する「NPO法人深草・龍谷町家コミュニティ」を設立し、業務を委託。同NPO法人には地元に通じたスタッフが常駐し、学生団体「京まちや七彩コミュニティ」を結成し、多世代が交流する地域コミュニティの創出と地域活性化に寄与することを目的に活動している。

3 町家deうどん

全学への公募で集まった学生は、前出の学生団体に所

属する学生と一緒にイベント当日の内容を企画し、また、うどんづくりの講習を受けて全体のリハーサルを行う。講習では、本学農学部教員が本格的なうどんづくりを指南することもある。

当日は、本学の学生のほか、NPO法人が募集した地域の親子やお年寄り、本学の留学生、時には高校生や他大学の学生など約20名を3、4グループに分け、うどんづくりに取り組む。学生が参加者に手順を教えながら、皆で小麦粉をこね、生地をまとめていく。うどんの生地をしばらくねかす間に、学生が準備していたうどんや和食文化に関するクイズやゲームを行って場を盛り上げる。



その後、生地を延ばし、包丁で切つて、麺を茹でている。茹でるのは、学生が薪で火をおこしたかまど。おんどさん。を使う。そして、別途作った出汁をかけ、薬味を入れて

おいしくいただく。深草町家キャンパスは出汁の香りと参加者の笑顔に包まれ、そこに多世代・多文化交流が実現している。

4 地域とともに

「町家deうどん」は一見するとシンプルなイベントに見えるが、これを実施するための環境が整っていたからこそ実現できたと考えている。

まず、本学は「社会に開かれた大学」としての役割を果たすことを重視し、社会貢献に着目し、「エクステンション（普及）」を教育・研究と並ぶ大学の使命として位置付け、1991年に龍谷エクステンションセンターを開設した。以来、地域社会と共に発展することを目指してきた。そして、2013年に深草町家キャンパスを設置し、そこに地域とのコミュニティが形成された。

「町家deうどん」は、さまざまなご縁によって実施されているのである。地域貢献というが、大学が単に地域に何かを与えているのではなく、地域の方々がおられるからこそ地域連携が成り立っている。学生には、地域の一端を担っていることを喜びに感じ、地域の中でかけがえない存在に成長してほしいと願っている。